

浄土を求めさせたもの — 『大無量寿経』を読む—

第 111 回 (2018.05.14) の要旨

拝読文(『真宗聖典』57頁)

必ず超絶して去ることを得て、安養国に往生せよ。横に五悪趣を截りて、悪趣自然に閉じん。道に昇ること窮極なし。行き易くして人なし。その国逆違せず。自然の牽くところなり。何ぞ世事を棄てて勤行して道徳を求めざらん。極長生を獲べし。

この段の「横截五悪趣、悪趣自然閉、昇道無窮極」という言葉は、道綽禪師が『安楽集』に引用されています。道綽禪師が生きしたのは、南北朝の王朝が次々と変わっていく時代でした。それは単に人間の権力機構が変わるだけではなく、価値観も変わっていくのです。前までは良かったことが批判されて、また違う権力が立ち上がる。そういうことが繰り返されて、何が本当に正しいのかわからなくなってしまった時代でした。

ですから道綽禪師は、これはもう像法の終わりだと言うのです。正・像・末の像法が終わり、末法に入ると。そのような時代でしたから、自力で修行するということは言うておれない。本願のよびかけてくる慈悲の教えによって称名念仏を取っていくしかない。だから称名念仏して浄土に生まれて往こうではないかと、道綽禪師の『安楽集』は、そのようによびかけているのです。安楽浄土を願生するように呼びかける要文を集めているのが『安楽集』ですから、その中にこの「横截五悪趣、悪趣自然閉、昇道無窮極」という文も取り上げられています。浄土の功德として引用されているのです。

この世の我々は何が本当に善いのかということは、自分で判断してもなかなか決まらないですし、決めていても間違ふことが多い。正しい道だと思っていたが、実は間違っていたということになりかねない。そういうことが繰り返し起こってしまうようなことが、この世の有り様です。そしてこの世は無常と言われるように、どんどん変わっていきます。そういう中であって、本願が浄土を建立したいという時には、本願のはたらく場所には、そこに生まれ直せば、もうその場所で安心して仏法を求め、仏法を聞いて修行して仏になっていくことができる。そういう場所を建立しようというのが、もともとの方向性なのです。ですから『無量寿経』の文も、ほぼそういう方向で説き出されています。浄土に生まれたならば、仏の弟子となって聞法し、修行して必ず仏になっていくことができる。そういうことが、繰り返し『無量寿経』では言われているわけです。その代表的なものが、この「必ず超絶して去ること得て、安養国に往生せよ。横に五悪趣を截りて、悪趣自然に閉じん」という言葉なのです。

横さまに五悪趣を截る、と。五悪趣は一般的には、地獄・餓鬼・畜生・人間・天上の五つを指します。これに修羅を加えると六趣、六道になります。「趣」という字は、状況存在を規定する在り方というものを言い表しているようです。その五趣が、五悪趣であると言われます。五趣全体が悪であると。これは、倫理的な意味ではありません。流転を超えて仏に成るとというのが仏法ですから、仏に成るという方向を善とするなら、流転することは悪になります。天であっても人であっても、流転の中にあるという意味では悪趣なのです。

この「横截五悪趣、悪趣自然閉、昇道無窮極」という『無量寿経』の言葉を、道綽禪師は浄土の功德として引用しています。この世では求めても得られないから、浄土に生まれてから与えられる功德だという眼で、これを引用されています。ところが、親鸞聖人は、これを「真仏土巻」には引用されないのです。どこに引用されるかということ、「信巻」に引用されるのです(『真宗聖典』243頁)。親鸞聖人ご自身はこの文を、決して彼の国に行ってからこのような利益があるというようにはお取りにならず、他力の信心に帰するならば、本願他力のはたらきに身を本当に任せるといふ決断が出来るなら、この利益をいただけるのだと受け止められました。これを『正信偈』では、「獲信見敬大慶喜、即横超截五悪趣」とおっしゃるのです。獲信、つまり信心を獲得するということが成り立つのなら、本当に喜ぶことが出来る。大慶喜が与えられる。では、本当に本願力に帰するということは、どこで成り立つのか。大慶喜と親鸞聖人がおっしゃっていることは、どこで確信できるのか。死ななければ慶喜できない、という話ではないはずで

「獲信見敬大慶喜」ですから。信を獲れば、見て敬い、そして大慶喜、大いなる喜びが恵まれるのだと。

親鸞聖人は徹底して、真実信心に立つということをおっしゃるわけです。真実信心に立つということは、我々はなかなか容易なことではない。しかし親鸞聖人は少なくとも真実信心に立って、そして本願念仏を堂々と本当の仏教の極意だとおっしゃって生き抜かれたわけです。だから親鸞聖人の教えに触れようとするなら、何かやはりそういう親鸞聖人が為した大切な課題というものをどこかで我々自身も触れて行きたいということがないといけないと思うのです。

そして親鸞聖人が、この必得超絶去の文を「信巻」に引用するという事は、信心という事実において安養国に往生して、横ざまに五悪趣を截するということが成り立つのだと、おっしゃるわけです。では、濁世を生きているということと、浄土に生まれるということとを、どのように考えるのか。そこで親鸞聖人は徹底的に、愚かな凡夫の分限と、大悲の本願のはたらきとの境界線に立つということをおっしゃるわけです。

その問題に非常に積極的に触れて下さったのは、曾我量深という先生です。曾我量深先生は、その問題を一生考えられた。そして1961年の、親鸞聖人七百回御遠忌の講演会で、このテーマをぶつけたのです。それが有名な「信に死して願に生きよ」という講演です。信に死ぬ、つまり信心においてそれまでの人生に死ぬと。そして願に生きる、本願を依り処にして立ち上がるのだと。それまでの妄念の主体であった自己に死んで、本願を主体とするような命を生きる。だから曾我先生は若い頃から、自分の中に信心が立ち上がるということは、法蔵菩薩が立ち上がったのだと。法蔵願心が受けとめられるということは、法蔵願心自身が立ち上がったことなのだとおっしゃっていて、単に外側の他力ではない、主体となって下さる他力なのだ。それまでは依り処を求めてウロウロしている自我を主体と思っているのが、そうではない主体がここに立ち上がる。それが信心なのだ。信心を生きるということは、妄念の主体に死んで、信心の主体に生きるという。そういう決断が成り立つのが、決定心であり、それが成り立つのが信心なのだ。

他力というと、何か他所から自分をたすけてくれるものだと。自我を外から助けてくれるのだと考えているわけです。そうではない。その自我が死んで、本願他力に立ち上がるのだと。こういうふうに曾我先生はお考えになった。つまり親鸞聖人の教えは、そのようにいただくべきものだとおっしゃることを、明らかにして下さった。親鸞聖人は本当に一生かかって考え抜いて、明らかにして下さったけれど、そのことを本当に引き受けた人は、歴史の中にほとんどいないのです。曾我先生が初めてと云ってはいけないかも知れないけれど、久しぶりに曾我先生が引き受けた。

事ほど左様に、本当に現生において、現に生きているままにおいて、往生の事実を本当にいただくことが出来るという。その大きな感激をいただくということは、容易なことではない。『無量寿経』の第十八願成就文に、「願生彼国、即得往生、住不退転」（『真宗聖典』44頁）と言われているのですから、願生すれば即生まれて不退転に住する。その不退転に住するという事を親鸞聖人は、現生正定聚とおっしゃる。現生に不退転に住するとおっしゃるわけです。現生に不退転に住するという事は、往生するという事と同じことだということをおっしゃっているわけです。即得往生ということは、不退転に住するということなのだ。不退転に住するということは、即得往生なのだ。こうおっしゃっているわけだから、ちゃんと親鸞聖人ご自身はおっしゃっているわけです。それが本願力回向による往生だと。我々はそれがわからない。本願力回向の事実、まともに出遇っていないからです。考えているだけだからです。ですから親鸞聖人は、「獲信見敬大慶喜」とおっしゃる。獲信があったら大慶喜が起こって、「横截五悪趣」という事実に出遇えるのだと。六道流転の命に死ぬのだと。

これを曇鸞大師は、「業事成弁」と言われる。道綽禪師は「業道成弁」と言われている。多分これを根拠になさって蓮如上人は、「平生業成」ということをおっしゃるのだと思います。業ということは結局、我々の流転の命を業という言葉で表現しているのでしょう。業道が成弁するといことは、六道流転の命が終わると言うことです。平生の信心のところに、実は業成が成り立つのだと。業事成弁が成り立つのだと。これは親鸞聖人の横截五悪趣の了解と重なっているのだと思います。

本願を生きるのだから、何か立派な人になって、もう煩惱を起ささないのかと。そんなことはない。相変わらずの凡夫です。煩惱具足の凡夫、生死罪濁の群萌、これが往相回向の心行を獲る。往相回向の心行を獲ても凡夫であることは変わらない。にもかかわらず流転輪廻の命を截るのだと。本願力が截るので、

自分で截るのではない。それが横截です。横ざまに截る。本願力が截って下さるのだと。私が自分で截る必要がない。不思議な考えです。

我々は、自分で出て行ったり、自分で超えたり、自分で截ったりしなければいけないと思っている。それを、親鸞聖人は豎形の発想だと言うわけです。自力の発想だと。本願他力を信ずるということは、横に截られることをいただくのだと。横に截られるということは、凡夫であることを止める必要はない。凡夫の生活のまんまに大悲の本願の光の中にあるということに信ずる。それは凡夫の命と矛盾しないわけです。だから、凡夫の命でありながら、五悪趣を截るとはどういうことだろうと考えたら、さっぱりわかりません。そのような構造をどう表現したら良いかという時に、大変難しい問題が絡むから、そこを曾我先生は「前念命終、後念即生」という善導大師のお言葉を手がかりにして「本願を信受するは、前念命終なり。即得往生は、後念即生なり」（愚禿鈔）とあるけれど、前念と後念というけれども、前と後の念というけれど、前念から後念へという時の念自身は一念なのだ。二念ではない。一念の前後なのだ。わけのわからないことを言うなど、私は学生の頃、講演を聴いた時には思いました。

でも、それは、凡夫であることと、光に遇って、五悪趣を横ざまに截っていただくということとが、どういう関係かということと言おうとすると、前念に死んで後念に生きるということになるのです。妄念の自己に死んで、本願の主体に生きるということは一念なのだ。二念ではないのだ。不思議な構造だなど。どういうことを言っているのだろうと。考えてわかるわけではないのです。考えてわからないから、長い間私はそれをテーマとして、ずうっと考えて来たのです。

これはやはり、願力に帰することの難しさ。願力に帰するという事は、向こうは凡夫であることを障げとしないのだ。我々の立場は凡夫である。凡夫であるままにお任せしますという向こうからはたらきが来ていることを信ずると。このように人生が見えると、実に楽になるのです。自力でやらなければいけない。自力で克服しなければいけない。自力で煩惱を起こさないようにしなければいけないなどと思ったら、もう地獄の沙汰です。悪戦苦闘しても、どうにもならない。

そういうのは、親鸞聖人は、そういう苦勞を経験された後で、こういう問題に本当に出会っていかれた。だから、なかなかこの問題は、容易なことではない。「前念命終後念即生」が、一念の事実の内容だということは、「南無阿弥陀仏」の中に凡夫がそのまま往生するという事実を与えていただけるのだということ。それが一念の前後なのだ。これは、なかなかわかりません。

我々は宗教体験を過去形で考えようとする。体験した、体験したのだと考えたい。体験したら凡夫ではなくなるはずでしょう、と。凡夫のままならば、体験したことにならないではないかということになる。でも、それは違う。凡夫であるけれども、依り処、凡夫の自我を依り処とする発想から、本願力を依り処にするという転換をする。転換したら終わりではなくて、転換するという一念が、常に一念なのです。往生という事実は、本願力によって成り立つ生の転換を、新しい生に生まれると表現したのですが、それは念念に生まれているのです。念念に妄念に死んで、新しい命に甦るということが、ずっと続くわけです。それが親鸞聖人のおっしゃる、「信の一念」の内容なのだと思うのです。

さて、「必ず超絶して去ることを得て」ということは、流転の命を超えることが出来ると。それは決してこの命が終わってからはではない。横ざまに截って下さるということが起るのだと。こういう話です。

次に「安養国に往生せよ」とあります。安養国は阿弥陀仏の浄土ですが、これを親鸞聖人は眞実報土という言葉で押さえています。報土というのは、本願に応じて、本願に酬報して生み出された国土、という意味です。それは本願が造りだそうとしている国ですから、本願のはたらきが信じられるところに感じられる国なのです。それは光明無量、寿命無量と言われますように、無限です。無限のはたらきであり、無量の功德です。

さらに、「横に五悪趣を截りて、悪趣自然に閉じん」と言われます。悪趣というのは、五悪趣、つまりは六道流転のことです。それが自然に閉じる。横ざまに截られるのですから、こちらから流転を截るのではない。流転はひとりで閉じるのです。そして「道に昇ること窮極なし」と。仏道を「昇る」という表現で押さえているわけですが、そこに極まりがない。極まりがないのですが、「行き易くして人なし」。行き易いけれども人がない。このことを親鸞聖人は、「信巻」の初めの眞実信心を押さえるところで、眞実信心は「易往無人の浄信」（『眞宗聖典』211頁）であると言っています。本当に当たり前のことなのだけれど

も、わかる人がいないと。誰でも分かりやすいのだから、誰でも信じてくれるかということ、そうはいかないのです。本当に易しい道なのですが、1人も信じてくれる人がいない。そういう質のものなのです。なぜなら、人間の常識では考えられないことが起こるからです。人間は人間の常識で生きていますから、常識的でないことは信じられない。だから、1人もいないということになる。「易往而無人」なのです。このような押さえを親鸞聖人は、『無量寿経』をもとにしておられるのです。

本文に戻りますと、「その国逆違せず」と。命が生きている方向と本願が願っている方向とは、同じ方向です。「逆違」は、逆らうということです。川の流りに逆らうように、何か我々は流れに即しながら生きて行くということが出来難い。常に何か問題を感じて逆らってしか生きられない存在です。「自然法爾に生きよ」と言われても、我々はそうは行かない。常に何か悩んだり苦しんだりして、自分の命の在り方を自分でいじめているところがあります。それに対して本願力に随順するという、これが「その国」に往くということですが、本願力の国に往けば逆違しないのです。

しかもそれは、「自然の牽くところなり」と言われます。ひとりでにそうなって行くのだと。このようにいただくことは、なかなか容易なことではありません。やはり、自我があるとだめなのです。けれども、凡夫は自我が死ぬことはないのです。自我が死ぬなどと思うことは妄念なのです。自我が死なないから、この国を願生するしかない。願生してみたら、願生即得生。願生はそのまま得生なのです。一念同時なのです。だから立場を転換すれば、そこにもう利益は来ているのです。我々の世界は矛盾だらけですが、けれども本願力に帰するという決断ができれば、もうそのまま生きていける。それは、念々に、変わりつつ変わらないという生命の事実を生きるが如く、常に本願名号をいただき直して生きるしかない。こういうのが凡夫の事実だと思うのです。だから、過去形にしないわけです。「獲得しました」ということにはならないのです。信心を生きるということは、常に現在形というか、現在進行形なのです。

そこから「何ぞ世事を棄てて勤行して道徳を求めざらん」と続いていきます。世間を捨てるということは、世間の関心を超えるということです。我々は世間を超えられませんが、とにかく勤めていって、道徳を求めないのか、と。この場合の道徳は、本願力の方向を向いた善という意味でしょう。本願力に随っていくことが善であり、その意味では念仏が最高善なのです。この世の倫理的な善ではありません。この世の倫理的な善の中で最高のものだと言ったら、とんでもないことです。この世の倫理に、最高はありません。人間のやることは何であろうと、相対的にしか成り立ちません。でも、仏法の方向を向いて善ということを考えれば、念仏が最高善なのです。凡夫である我々にとっては、本願を信受するところに善が成り立つ。本願の名号を信受するという道が、最高善である。このように言うことができるのです。

次は「極長生を獲べし」という言葉になっていますが、「信巻」の初めでは眞実信心が、「長生不死の神方」(『眞宗聖典』211頁)であると押さえられています。信心自身は死なないと、親鸞聖人は言っているのです。無明の命は死ぬけれども、本願の命は死なないのです。ですから「長生不死の神方」は、この世の命が長生きするということを言っているわけではありません。信心が持つ本質、時を超えるような本質の話がされているのです。時の中にあって時を超えるということは、死なないというものに触れるということなのでしょう。これはなかなか、文字通りにわかろうとしてもわかりません。どんなことになるのかと考えると、さっぱりわからない。親鸞聖人でも亡くなったではないか。何で長生不死などと言えるのだ、と思われるかもしれません。しかし、親鸞聖人の信心そのものは、本願力回向の信心ですから、それは死んでいないのです。

本願力回向という事実は、これは誰でもそれに出遇っていける命でしょう。命という言い方は適切でないかもしれませんが、だから長生不死なのです。妄念の自己に死んで本願の命に甦るということは、妄念の命は死にますが、本願の命は死なないということです。それは不思議な構造だと思います。我々が死ななくなるのではないのです。我々はやはり諸行無常の命を死んで行くのですが、信じた信心そのものは本願力回向の信心です。法蔵願心が立ち上がったものです。その法蔵願心は死なないのです。そういう信念が与えられる。不思議なことだと思います。

文責 青柳英司(親鸞仏教センター研究員)